

Chapter. 0

事物の特定と冠詞の役割

冠詞は常に名詞とともにあり、名詞にさまざまな意味を与えるという重要な役割を担っている。従って、冠詞を理解するには、同時に名詞を理解する必要がある。

冠詞には、不定冠詞、定冠詞、無冠詞（ゼロ冠詞ということもある）の三つがある。できるだけ記号の使用を避けるつもりであるが、本書では場合により、それぞれ a、the、 ϕ と表記する。三つの冠詞のなかで最も理解しやすい冠詞は the であり、ついで ϕ 、最も理解しにくいのが a である。不定冠詞には an もあるが an は名詞が母音（表記ではなく発音である点に注意）で始まる場合に用いるだけのことであり、このことは英語関係の入門書には必ず書いてあることである。ただし、必要に応じて不定冠詞は a (an) と表記することもある。

他方、名詞は、もの、こと、状態、さらには抽象概念を表わす。名詞は通常、数えられる名詞（本書では場合により [C] という記号を用いて表わす。C は countable の略）と数えられない名詞（本書では場合により [U] という記号を用いて表わす。U は uncountable の略）に分かれる。数えられる名詞には複数形があるので [C]s と表記する。[C]、[U] に関するむずかしい問題の一つは名詞が [C]、[U] のいずれのグループに属するかが必ずしも直観的にわからないということである。もう一つの問題は [U] が場合により [C] として使われるということである。これらの問題は冠詞の使用における基本的な問題なので、本文中で折りにふれて扱うことにしたい。

冠詞に三種類、名詞に [C]、[C]s、[U] の三種類があるので、全体としては 9 つの組み合わせがあるが、そのうち三つは使われないので、実際には表 0.1 に見るように 6 つの組み合わせが使われる。

表 0.1 冠詞と名詞の組み合わせ

	a	ϕ	the
[C]	a [C]	—	the [C]
[C]s	—	ϕ [C]s	the [C]s
[U]	—	ϕ [U]	the [U]

本書は基礎編と応用編の2部で構成されている。

基礎編では、冠詞の基本的な意味と用法を解説する。先に三つの冠詞のなかで不定冠詞が最もむずかしいと述べたが、本書では不定冠詞の意味を以下の5つに限定して解説する。

- 1を表わす
- 不特定の一つの事物をさす
- 特定の一つの事物をさす
- カテゴリーのなかの一つであることを表わす
- 任意の一つの事物をさす

文法書や多くの冠詞に関する解説書ではこのほかに「～につき (per)」と「同じ」という意味も入っている。本書ではこれら二つの意味については簡単に触れるにとどめる。というのは、前者はもともと前置詞で別の語形だったものがある時期 a になって、冠詞のところに入れられたという経緯があるからである。後者は現在ではわずかなことわざのなかで使われ、実際にはほとんど使われることはない。ただし、受験英語の世界ではしぶとく生きのびているので無視するわけにはゆかないのである。

冠詞の解説においては、文法書のように単に意味を羅列するのではなく、どのような場面で何を表現するために必要なのかという視点から解説した。「何を、どのような場面で」がわからなければ冠詞は使いこなせないと考えるからである。もっとも、英文を読む場合には、文法書に書かれている意味で十分ではあるが。

応用編では「まえがき」で述べたように、冠詞の例外的な用法や高度な問題を取り上げる。

名詞のところで述べたように、名詞には〔C〕と〔U〕がある。簡単に〔C〕あるいは〔U〕に属する名詞を見ておきたい。〔C〕で最もわかりやすい名詞は一つ、二つと数えられる「もの」である。たいていの本で〔C〕の説明に身近な「もの」、例えばリンゴのような果物を用いるのはこのためである。これらの「もの」は明確な境界あるいは輪郭をもっている。これに対し、project（プロジェクト）、condition（状態）、meter、hourのようなさまざまな単位のように手で触れることのできない（intangible）ものになると私たちには少し理解がむずかしくなる。

他方、〔U〕にはwater、oilのように一つ、二つと数えることができない「もの」、peaceのような抽象概念、evidence（証拠）のような集合名詞、多くの固有名詞が入る。さらにasthma（喘息）、diabetes（糖尿病）など多くの病名、元素名、学問名なども〔U〕に入る。ただし病名には、cataract（白内障）、rash（発疹）、ulcer（潰瘍）のような〔C〕、数は少ないが（the）measles（はしか）のようにときにはtheをとるものや、Alzheimer's disease（アルツハイマー病）、Parkinson's disease（パーキンソン病）のような人名つきのものもあり、簡単ではない。詳しくは、〔C〕については「不定冠詞の世界」の「数えられる名詞」の項で、〔U〕については「無冠詞の世界」で述べる。

本書では「まえがき」で述べたように、実在する事物と頭のなかで描いた事物を区別して考えてゆく。このようにして初めて、基礎編の「不定冠詞の世界」で述べる「特定」や「任意」の意味も理解できると考えるからである。このことをわかりやすく図示すると図0.1のようになる。この図の少年は実在する少年を描いたものとする。少年は一人の男性が公園を走っているのを眺めている。この男性は「不特定」ではなく「特定」の人である。一方、頭のなかでは、「人間が永遠に亀に追いつけない」という「ゼノンのパラドックス」の問題を解こうと恩案している。ここに登場する亀は「任意」の亀ということになる。

最後に、本題から少しはずれるが、冠詞から見た書き言葉と会話における話し言葉の違いを少し考えてみたい。冠詞から見た書き言葉と話し言葉の最も大きな違いは、前者では情報の流れが書き手から読み手への一方向であるのに対し、会話では双方向であるという点である。本文で詳しく述べるが、冠詞の重要な機能



図 0.1 観念の世界と現実の世界

に事物の特定化がある。会話では特定化が比較的容易である。目の前にあるものは場合によっては指で指し示すこともあるし、相手が指している事物がわからなければ聞きただすことも可能である。さらに会話では双方で認識を共有している話題を取り上げること（従って the を用いる）が比較的多い。

これに対し、書き言葉では、冠詞やその他の指示詞、場合によっては関係代名詞節などの修飾句を用いて、一つずつ手順をふんで特定化しなければならない。書き言葉の方が特定化するという面でははるかに大変なのである。もちろん、相手の話を瞬時に理解したり、自分の言いたいことを瞬時に言葉にするという会話の大変さは、読み手や書き手が比較的時間を自由にコントロールできる読み書きと比べて質の異なるむずかしさはあるが。

C o l u m n

冠詞のある言語とない言語

英語には二つの冠詞（無冠詞を入れれば三つ）があるが、世界の言語における冠詞の存在に興味を湧いて、図書館で調べたことがある。

英語のように不定冠詞と定冠詞の両方がある言語には次のようなものがあるが、どちらかと言えば少数派である。猪浦氏（2016：9）によれば全体の1/3くらいである。

イタリア語、インドネシア語、英語、エジプト語、オランダ語、スウェーデン語、スペイン語、デンマーク語、ドイツ語、ノルウェー語、ハンガリー語、フィジー語、フランス語、ルーマニア語、ハワイ語

他方、多数派である冠詞のない言語には次のようなものがある。

ウルドゥー語、エストニア語、韓国語、クメール語、クロアチア語、サンスクリット語、上海語、スワヒリ語、タイ語、タガログ語、チェコ語、チベット語、中国語、トルコ語、ナヴァホ語、日本語、ネパール語、バスク語、ビルマ語、ヒンディー語、ベトナム語、ペルシャ語、ポーランド語、モンゴル語、ユーゴ語、ヨルバ語、ラオス語、ラップ語、ラテン語、リトアニア語、ロシア語

定冠詞しかない言語には次のようなものがある。

アイスランド語、アラビア語、アルバニア語、ウェールズ語、ギリシャ語、ブルガリア語、ヘブライ語、マケドニア語

冠詞のある言語は屈折語^{註1)}に属するものが多い。他方、冠詞のない言

語は孤立語^{注2)}、膠着語^{注3)}に属するものが多い。同じインド・ヨーロッパ語に属する言語でも、スラブ系のチェコ語やロシア語には冠詞がなく、ブルガリア語には定冠詞しかない。

冠詞の位置も英語のように前置型とは限らない。例えば、ルーマニア語の定冠詞は名詞や形容詞のうしろにつく。また、ノルウェー語、デンマーク語、スウェーデン語の北欧語では不定冠詞は前置型で、定冠詞は前置型と後置型の二通りの用法に分かれる。

このように冠詞に注目するだけでも、世界の言語には多様性があることがわかる。冠詞がない言語はどちらかと言えば多数派であり、冠詞で苦労するのは日本人だけではないことが想像される。一例としてインド人が書く英語を取り上げてみたい。インドの公用語であるヒンディー語は英語と同じくインド・ヨーロッパ語族に属するが、上述のように冠詞がない。そのせいか、日本人より英語に慣れているはずのインド人も冠詞には苦労するようである。科学論文でインド人の書いた英語を少し調べたことがあるが、冠詞が必要なケースで無冠詞になったり、初出で the が使われたりという、私たちと同じような誤用を時々するのである。

注1) 屈折語では、内容語の文法的機能は、語自体の変化形により表現されるか、つけ加わる機能語によって表わされる(例、ラテン語、ギリシャ語、アラビア語)。

注2) 孤立語では、形態素がすべて独立性のある語であり、語は語形変化をしない。語の意味的役割は語の配列により決まる(例、中国語、ベトナム語、タイ語、ラオス語)。

注3) 膠着語では内容語の文法的機能は、原則として内容語につけ加わる機能語によって表わされる(例、日本語、朝鮮語、トルコ語、フィンランド語)。

なお、肝心の英語は屈折語に入るが、孤立語の要素ももっている。(注)は風間喜代三ほか著『言語学(第2版)』(2004.69)を参考にした。文責は著者にある